

【散文詩】

密室薔薇言葉

天津孔雀

そのとき現（うつつ）は ほんの一瞬（たまゆら）棘を緩め

もの柔らかな白昼夢へと ものの見事にメタモルフォーズを成し得てみせた

或いはそれは いつの間にか現実のすきまに人知れず胎生していた僕の夢想が

永い涙の雨季を経て ようやく固い繭の中から透明な翼を空に向かっておぼおぼと差し出し 哀しく美しく劇的な形で 白昼堂々密やかな孵化を遂げた

それはそれは 大いに愛すべき大それた一刹那

夏の真昼 ヒラヒラと交錯する漆黒とミモザ

たわむ黒 時折り不意に 宙に在りながら身じろぎもせずに風ぐ黄色

小さく微かな羽ばたきに寄せて しきりと轉（さえず）る小鳥が奏でる小止みなく続く円舞曲

地下深く柩の内側で もう幾千万もの季節の化転を眺めつつ退屈にまみれている死者達が

互いに囁き交わすように くちずさんではまた押し黙る とぎれとぎれのレクイエム

足元から秘めごとのようにしつとりと伝わり来る 張り巡らされた薔薇の根が

また何かを捕まえた顫動 生成り色した蛆虫の蠢き 優しく愁わしい時間の愛撫のあまりの鋭さに 最後に

纏ったドレスははだけ 土の褥でつまびらかに晒された肉体が語り出す物語は

きつとさぞかし淫らな古びた悲劇 一人になると決まって酷く僕を煩わす耳鳴りも 今日

は乾いたチエンバロだ 置き去りにされて腐乱した それでもかかつては美しかった花々の

諦めたように色褪せて 絶望的に甘美な馨り 死臭を含み駆け抜ける 真夏の真つ赤な風に揺られ

離れては また淫靡に触れ合う 薔薇の花びらと僕の頬

寄宿舎の裏手にひっそりと拡がる墓地で 遠近に少し

づつの 小さな群れをなして飛んでいる 夏型の 一回り大きな揚羽蝶

水色の空へと浮かび ざわめく緑の森へと沈む

息を吸って閉じた臉を染め上げる 僕だけに見えて
いる 霧深い幻想の湖畔で

蝶はいよいよ数を増す

これは 鏡の中に幽閉された ナルシスの為の葬列だ

行っちゃダメだつて 本当はちゃんと解つてたんだ

だつて誰もいないのに西の窓が突然バタリと風で開い

たり 嫌な予感がしたものの

鏡を見る度思い出す ギムナジウムの夏休み

僕の背中には赤く熟して涙の滴る傷痕がある

あの日 荒々しい 肉欲にまみれた大きな男の手で

残らず羽根を筆られた

けれども忌まわしいはずの傷口が ドクドクと とき

めくように疼くのは

神様 一体どうしてなの？

ラテン語の宿題がわからないからと言つて 先生の部

屋を直接訪ねるのは

僕には後ろめたいものがあつた

だつて誰かに見つかったら きつと良くない噂をたてられる

どうしてかつていうと 他所の学校からかわつてきた

ばかりの若い先生

横顔に影の兆したとびきりの美青年の周りからは 彼にまつわる悪い話しか聞こえてくるのが無かつたからだ

そんなの何の根拠もないデタラメだと思つて ちつとも

気にとめてなんかいなかった

そう あんな目にあうまでは

先生には少年愛の趣味があつて 教え子だつた大人し

い美少年を酷いやり方で散々犯して

そしてその子は 湖に落ちて死んだつて

初めて耳にした時それはえもいわれぬ なんて美しい

御伽噺なのだろうと

僕はうつとりと聞いていたんだ そう 僕が同じ目に

あうまでは

酷いことつてどんなだろう？ その時悶える少年の陶

器のように白い手足には

きつい縄目が食い込んで 甘い痛みと後ろ暗さのある

快楽を 幼いカラダに思う存分

思い知らせていたのだろうか？

とめどなく溢れて流れ落ち　とうとう床を濡らしたものは　はたして涙だけだったのか
それとも

心もとないノックの後で　重い扉が開く音

手招く闇　誘う白い手

僕の大好きなマドレーヌがちょうど焼きあがったとき
のような

ヴァニラとシトロン　甘ったるい馨りを纏った悔恨が
媚薬になつて頬を火照らせ

襟元までしつかりボタンを留めた白いシャツの上から
でさえも

うつつすらと　汗ばんだ膚を　それは不用意に騒立たせ
る

手を握られ　そのまま強く引つ張るように抱き寄せら
れたらもうダメだ

永いキスのあげくに舌を噛まれ　痺れる全身

シャツは乱暴に引き裂かれボタンは弾け飛んだけど
靴下留めは優しく外され　半ズボンは自分で脱いだ

ねえ君　モーリッツアの「春の目覚め」を読んだこと
はあるかい？

夢に夢見て待ち焦がれてた　悪魔はヘルマフロデイト
ス

いつだってそう始まりは　ほんのささいな出来ごころ
悪いことだと僕ははつきり知っていた

飛び降りるために駆け登る　恋は甘美な十三階段

アダムもイヴも大嫌い

結ばれることを赦されているのは男と女　必ず異性と
異性だなんて

何処までも迷惑な迷信だ

僕は　愛する男に抱かれながら　思いつきり射精がし
たい

いきりたつた固いペニスに後ろから深く貫かれ　葡萄
の色した乳首を尖らせ

失神するほど貴方には犯して欲しいんだ

昼間の世界は馬鹿に明るく　まるで理不尽な煉獄だ
後ろ手で閉めた重たい扉　二度と開かない鍵を掛け

二重に下ろす赤い天鵝絨のカートン

裸になり目隠しをして大きなベッドで待っていていれば
やがて必ずやって来る　圧倒的な　夜の勝利

そつと秘密裏に世界の秘密を暴いてしまおう　僕らの
最後の悪戯だ

そして深く殉教するんだ 僕は美の為に死ねるんだ
無防備な魂だからこそ 善と悪とを超越し戯れるよう
にして 重ねに重ねた恋の罪

黒々と麗しくとぐろを巻き 攻撃的に牙をむいた

忌まわしい美貌を誇らかにみせつける肉欲に噛みつか
れ 僕は助かりそうにない

踊る赤い靴 恋する虜

流れ出すふしだらな二人の血が 限りなく白く混ざり
合い

ほらこんなにも ポタリポタリと滴っている

それは淫靡な月光だ 月はひとしを輝きを増して と
ざれとざれ微かに

僕が喘ぐ声を聞いている

愛の言葉は乾いたチェンバロ 僕には親しい死の呼び
声

片翼だけでは上手に飛べない 僕は落下する揚羽蝶

恋がこんなにも痛いだなんて たくさん本を読んだけ
ど 何処にも書かれていなかった

書物を開いて心は閉ざし 今は黙って世界をうかがう
幼年皇帝 悪い大人は許さない

これは最高のデカダンス 心を惑わす妖艶なファムフ
アタルと呼ばれる存在に

ペニスがあつても良いじゃないか
ねえ そうだろう？

そのとき現（うつつ）は ほんの一瞬（たまゆら）棘
を緩め

もの柔らかな白昼夢へと ものの見事にメタモルフオ
ーズを成し得てみせる

或いはそれは いつの間にか現実のすきまに人知れず
胎生していた僕の夢想が

永い涙の雨季を経て ようやく固い繭の中から透明な
翼を空に向かっておずおずと差し出し 哀しく美しく

劇的な形で 白昼堂々密やかな孵化を遂げた
それはそれは 大いに愛すべき大それた一刹那

片翼だけでは上手に飛べない 僕は落下する揚羽蝶

恋がこんなにも痛いだなんて 貴方が僕に 僕の魂に
教え込んでしまったんだ

まみれる蜜 じっくり味わう鋭利な快樂
少年娼婦の硝子のヴァギナ 僕が横たわるのはイバラ

の褥 或いはマリアの腹の中
僕は落下する揚羽蝶 一人水辺に跪いたナルシスの苦

悩に蒼褪めた横顔は
湖に落ちて死んだ少年と それから僕に 僕にとつて

もよく似てた

飛び降りるために駆け登る 恋は甘美な十三階段
片翼だけでは上手に飛べない 僕は落下する揚羽蝶

怒れるヤヌス

あるとき僕がマヌカンをしているケンジントンの洋服屋に

それはそれは可愛らしい様子をした 利発そうな少女
が手袋を買いに来た

黒いコート 黒い帽子 黒い靴 艶やかな漆黒のマフ
で小さな両手を暖めている

可憐な御客様の眼の前へと 僕ははりきって とりど
りの手袋を並べた

とびきり優しい色だけを選び抜き冷えきった真冬のテ
ーブルの上に

堇 薔薇 フリージアにスイートピー 誰しもが眼を
細める繚乱の花園を拵えてみせたのだが しかし彼女
の滑(すべ)らかな白蝶貝の二つの耳が甘やかな色彩
の交響曲へと

傾けられることはついに一度も無く 迷わず手に取り
会計台へ乗せた手袋は

生地もリボンも履き口の毛皮もすべて黒一色で統一さ
れた喪に服す貴婦人の為の物だった

僕は不思議で仕方がなく　とうとう言葉にして華やかな彩りの手袋を勧めたんだ

しかし少女は頑なに　私には似合いませんと首を振るばかり

どうして？と尋ねると彼女は微塵の躊躇いも無く　あどけない声でこう言った

「だって私は人殺しの眼をしているから」
僕を見上げる少女の　燃えるような瞳の黒

誰が殺したクックロビン

大人たちが不用意に投げつけた心無い言葉の数々が
繰り返し繰り返しこだまして

夢の中まで追いかけてくる　耳にこびりつき　払い落
してもまたすぐ魂に絡みついて

やがて生涯解くことのできない禍々しい呪文へと忌む
べきメタモルフォーズを遂げるんだ

日々数多綴られてゆく惨たらしい暗黒童話

心臓に悩みの種を植え付けられ艱難辛苦にさらされる
無防備な主人公は必ず子供で

どれだけ頁をめくっても　その子は決して報われない
いくら抽斗を探しても魔法の杖は出てこない　悪い魔

女は手強すぎて御母様から教わった

「良い子にしていれば幸せが訪れる」という甘い御菓子
子でできているような

おまじないは　何度試してもちつとも効かない
そんな残酷な物語を紡ぎだす作者と呼ばれる悪い大人

は　どいつもこいつも身勝手
本当に腹が立つくらい御話しを書くのが下手くそだ

語彙も少なくレトリックも単調　完結させる技量も
ない

たいていは御話し途中　理不尽な目にあわされ続
けた挙句　何の救いもないまま

小さな主人公は息絶える　その時彼らの頬を銀色に光
りながら尾を曳いて滑り落ちていく涙は　世界で一番

小さな箒星

誰が殺したクックロビン　ねえ君　ここから先は　マ
マには内緒の話だよ

夏型の一回り大きな揚羽蝶が　今も僕の眼を塞いでい
る

尋常ならざる勢いで泣き続ける　哀れな子供の声を聞
く度

この手で葬り去ったはずの記憶の彼方　セピア色に歪

んで久しい古びた館の

仰々しい扉が僕の脳髓の深淵で陰惨な音をたてながら
開くん

僕にとつてそれは言い表しがたい不安を呼び起こす

不吉なセイレーンの歌声

飴色に凝固した時間の奥処 真つ赤に熟して弾けた柘

榴が糜爛も露わに転がっている

僕は 死者のように逆しまに歳をとりはじめ 裸足の

ままの震える脚で

迷宮としての夏休みへと 一步一步 ゆっくり ゆっ

くり退行する

きれいはきたない きたないはきれい

きれいはきたない きたないはきれい

夏型の一回り大きな揚羽蝶が 今も僕の眼を塞いでい

る

僕はまだ許してはもらえない

壮麗な祭壇画に描かれた幼児キリスト 敬虔な瞳でこ

ちらを見据える乳飲み子の

膝の上には赤い赤い柘榴が一つ 噛み砕いて飲み干せ

ばその果肉は人の味がするという

グロテスクだがアルチンボルドの絵のように調和のと

れた 形もまろらな深紅の果実

虫を磨り潰して得たコチニールという顔料の 滴る血
紅で麗々しく描かれてはいるが

実は受難の象徴だ

生まれた時から既に自らの磔刑を予言する象徴物（ア
トリビュート）に囲まれているというのは 神様の行

き過ぎた親切なのか それとも描かれた物質に意味を

与えた象徴学者達の大それた意地悪なのか それなら

ば僕の肖像画に描きこまれるべき物は 背景を埋め尽

くす程の夥しい柘榴と 薔薇に巻きつく太い蛇

匂い董の可憐な一生

僕はまだ小さすぎて反逆の為の鉄の一つも握れなかつ

た

ただ漠然と此処ではない何処かへと季節を渡っていく

燕が僕を啜えて飛び立ってくれるのを心待ちにして生

きていた

真夏でも必ず一番上までシャツのボタンを留めるのは

増え続ける折檻の痕跡を誰にも見られたくないから

さ オーデコロンを一吹きしたばかりの胸に煙草の匂

いが染みつくのは

嫌だけど それでも少しくらいの火傷で許してもらえ

るなら 抵抗しないほうが後が楽だ

ひどい目にあわされることがわかつているから 学校が休みになっても寄宿舎を出て家に帰るのは気が重かった どうせ御父様も御母様も外国での仕事で留守なもの

御祖母様と二人きりになると 僕ね 怖くて上手に喋れなくなるの

何を聞かれてもしどろもどろで彼女の望み通りの答えを出してあげられないから

真つ暗な夜の中 裸で柘榴の木に縛りつけられたつてもも言っちゃいけないんだ

神父様の御好意でせつかく聖歌隊に選んでもらえたのに典礼の間際に病気になつて

結局舞台に立てなかつた 歌を忘れたカナリアだから羽根を筆られ傷つけられても仕方がないの 役立たずだと誰かにのしられるたび 刃向かうどころか僕は

心から納得してしまふ 諦めることだけが幼い僕の処世術だつた

御祖母様が自分になつかない僕のことを世界で一番醜い子供だつて 口を開けば

誰彼かまわず吹聴して歩くから 僕の周りの生ある者達 兄弟も 使用人も

御祖母様をおだてては自分の事業に御金を出させよう

と度々訪ねてくる叔父さんや叔母さんも みんな足並みを揃えて僕を毛嫌いし汚い物のように扱った

楽しいことがあつて声を出して笑うと 人を馬鹿にした笑い方だと言つて大人達は一斉に怒り出す 怒りに

まかせて熱い紅茶の注がれたティーカップを投げつけ僕が避けて

壁に当たつて割れてしまつたら僕のせい でもね 学校へ行つてる間に大切な本を捨てられたら困るから謝るのはいつも僕

羽根を切られて飛べない小鳥も鳥籠から逃げ出そうとすると途端に銃口を向けられる

悪い大人達の怒鳴り声は僕を脅かす猟銃音 打たれた小鳥よこの指とまれ 飛び散る羽毛は二度と

乾かない涙のようだ 標本箱にひしめく蝶々 理科室で僕が会いに行くのを

じつと待つている剥製のウサギさん こつそり御母様の鏡台から持ち出したペンダントの

琥珀に閉じ込められた蜜蜂 死んでしまつた者達だけが僕の大切な友達だ

御祖母様の機嫌が悪い時に理由もあまいまま 物差しで何度も背中を叩かれても

僕はどうつてことない 黙つて良い子にしていれば

撃ち落とされた青い鳥が蘇り 碧瑠璃の翼を広げ僕を
ここから連れ出してくれるんだもの
でもね 幼い僕は知っていた 希望とは 人間が最後
にかかる病だ

誰が殺したクックロビン

時間の機嫌を損ねてしまい僕の時計は止まったままだ

眠りに就こうと瞼を閉じれば 必ず記憶のフィルムが
カラカラとひとりでに回り始め

かつて僕が味わった最悪の夏休みを 毎晩毎晩上映す
る

誰が殺したクックロビン

悪いことなど思いもよらず 僕は慎ましく生きていた
はずだ どうして僕を汚したの？

ウニカ・チュルンのジャスマン男 ナジャにとつての
アンドレ・ブルトン

ニジンスキーにはディアギレフ

捻じれてしまったメビウスの輪を元通りにひっくり返
し

焼けつくような円環の渴きを閉じる恋人は まるで互

いのドッペルゲンゲル

あまりに自分と似ている男を愛するのには ナルシシ

ズムの一言では済まされない

隠された天の摂理があるはずだ

僕らは洪水の混乱の中 離れ離れに産み落とされた魂
の双子

だからもう一度 裸になって 重なり合って 一つに
なろう

踏みにじられても董は董

ようやく見つけた愛へと捧げる 僕は燔祭の仔羔だ

我と我が身を痛烈に罰する無限の悔恨を せめて今だ
け忘却の水底へ水葬礼とするための

美しい魔法をかけあおう

背中に立てた叡智の爪 尚更愛しい死すべき肉身

寂しがるのも欲しがるのも ぜんぶ夜のせいにして

君と僕とで死の舞踏 さあ 魔宴(サバト)を始めよ
う

同じ毒を食む二頭の羔

一步踏み出せば真つ逆さ エロスの泉は死の泉 溺れ

ることなど解っているさ

どうあがいたって 濡れた羽根など纏れるだけだ

息つく間もない真紅の法悦　ハイエナたちの齒型のつ
いた　僕の心臓を差し出そう

僕の魂を求めるな　ケダモノどもが喰つてしまった
生きるべきか　死ぬべきか　疼く頭を恋人の胸に持た
せかけ

僕はいつまでもベッドにいたい　飛べない小鳥で充分
さ

こそれあつては擦り減る翼　そうだと　恋は二人を
炊ぎて喰らう貪婪極まる料理人

顔を歪めて　シーツを掴んで　嫌というほど次から次
へと深い絶頂がやつてくる

呻くように幸せと絞り出す声は　安堵の産声　或いは
歓喜の断末魔

墓石に貼り付く死後彫刻（トランジ）みたいに予期せ
ず醜く痙攣しても

甘く熟した秘密の場所からトロリトロリと滴り落ちて
は僕らに誘いかけている

眩暈がするほど素敵な聲に　贖えるはずもないだろう
奥までじっくりまさぐる鍵穴　堪らず溢れる白い蜜

撃たれた小鳥よ帰っておいで　アンドロギユヌスの僕
の子宮には

奪い取られたエデンへと再び戻る　秘密にまみれた扉

があるの

無花果の葉で隠された　僕の果実をさあ召し上がれ
霊肉一致の鋭い快樂　蠍が蠍を癒している

縛つてほしくて投げ出す脚　赤い御靴を履いたまま
悅楽の園で上手に踊る

僕はアンナ・パブロワよ
鋭利な愛撫に安心して　淫らに暴れる犠牲の羔

太い首輪をはめられて　勃たせた乳首をつねりあげら
れながら

閉じた瞼の裏側で悪夢は潰え眩い闇が凱歌をあげる
君なら僕に　もつと酷いことしても許してあげる

舌を這わせて綺麗にするから　何度も何度も僕に火の
酒を飲ませてよ

確かに生きているんだと僕が観念するために　おねが
い　もつと痛くして

恋に眩く僕らは聖なる愚か者　獣のように貪りあうこ
とを恥ずべきことだと思ふのならば

それは想念の悪疫だ
僕は鏡に映らない　激しく抱かれていなければ僕の存
在がわからない

僕の心にかつて悪意を持つて彫（え）りつけられた恐
ろしい呪文を　跡形もなく消すために

求める抱擁 求めるファロス 新たな呪文 そして魂
は満たされる

誰が殺したクックロビン

眼をつむると 僕を叱りにやってくる御祖母様の足音
が 僕には今でも聞こえてくるんだ

誰が殺したクックロビン

悪いことなど思いもよらず 僕は慎ましく生きていた
はずだ

誰が殺したクックロビン 僕を殺したのは誰だ

何も起こらない黄金の日々を 僕は心底愛していたの
に

誰が殺したクックロビン 僕を殺したのは誰だ どう

して僕を殺したの

撃たれた小鳥よ帰っておいで

アンドロギュヌスの僕の子宮には 奪い取られたエデ

ンへと 再び戻る扉がある

匂い董の可憐な一生 審美の瞳を閉じてはいけない

踏みにじられても董は董 ようやく見つけた愛へと捧

げる 僕は燔祭の仔羔だ

四月の董を墓として 僕は静かに殉教しよう 僕の柩

から溢れる董

僕は死んだら董になる

撃ち落とされた可愛い小鳥よ帰っておいで

アンドロギュヌスの僕の子宮には 奪い取られたエデ

ンへと 再び戻る扉がある

匂い董の可憐な一生 踏みにじられても董は董

四月の董を墓として 僕は静かに殉教しよう 僕の柩

から溢れる董

僕は死んだら董になる

誰が殺したクックロビン

愛のために死んだ者は 神の中に葬られる

夢の腐蝕

閉じたまま蔦の絡まる 唇は真紅に塗られた小さな椀
ギシギシ幽かに軋んだかと思うと すぐに言葉を飲み
込んで

ただただ沈黙を口ずさんでいる あのアンニュイな董
色

せつかくの日曜日 せつかくのよそゆきはボタンがち
ぎれ
せつかくの三つ編みが台無しだ

僕があげたりボンは何処？

なだらかにうねりながら肩に掛かる 拡げた翼のよう
な髪

見開いた瞳が凝視している虚空には一面の 真つ赤な
罌粟 嘘 ねえ 何が見えるの？

少女 鏡の向こう側それはふてぶてしく両脚を投げ出
し 退屈に腹を立て

薔薇色の頬つべたを膨らませた 赤い靴のアダリ―
セルロイドの顔面が暖炉の熱にジンワリ蕩け始めても

僕は驚いたりしない

麦わら帽子が似合うのはドイツ生まれで可愛いぶんだけ
残酷な

ブリキの殺し屋テレーズ・シニョレ

ダメだよエプロンで手を拭いちや またあの怖い船長
さんに嵐の海へと投げ捨てられる

カモメにばかり耳を貸さないで大人しくトランクの中
に隠れていておくれ

我が娘 陰毛の薄い 齒のあるヴァギナのフランシー
ヌ

ああなんてことだ 鴉がまた僕の目玉をつついてやろ
うと狙ってる

鋭い嘴は胡桃を割るのに飽き飽きして やがては僕の
心臓をえぐり出し

得意そうに笑うだろう

僕は 叶えられない夢を夢見て 夢に縛られるピグマ
リオン

昔々 誰かが少女を剥製にして それを人形と呼んだ
んだ

些細な汚れ ほんの一点の曇りに 白いドレスは悲鳴
をあげながら腐つてゆく

僕たちは 殺戮とも 量産され続ける悪夢とも無関係

に
薔薇の蕾の内側で内緒話を囁きあおう
僕らはいつまでも生まれぬ 僕らはいつまでも 優
しいマリアの腹の中

美味しそうに柘榴に歯を立て 眩しそうにまばたきす
る

思わせぶりの面映ゆい素振りが鋭利で それはそれで
あらまほしい

いたいけな自動人形さ

人形 単性生殖の花咲ける乙女たち 或いは限りなく
猫に似て とびぎり我儘な千鳥たち

人形 ドールハウスに収まりきらない程いつの間にか
背が高くなった

人形 すなわち私の娘

隣に座ると良い匂い 少女達を一人ずつ膝に乗せて
髪をかきあげヘッドマークを確認する

お腹のおがくずが血で湿ったら あなたを抱いてはあ
げられない

さかさまにして 僕の気がすむまでギターの稽古

君をバルテュスの絵の中に上手く閉じ込めたつもりだ
った

涙が枯れるほど喜んだけど 私は独り 髪の手まで孤
独だわ

爪先立ちして望遠鏡で怖々世界を覗いている あのア
ンニュイな董色

私はまるで予測がつかず こともあろうに大切な誕生
日 硝子の靴を贈ったの

鍵がかかっているはずの重い扉を易々と開き みんな
出て行ってしまったわ

私は狂暴で嫉妬深い母親 私は君臨する恐ろしい父親
私を真つ二つに引き裂く ペニス羨望と去勢の恐怖

いつてらっしゃいと言いながら半狂乱で影を踏む
あたしったら 慌てふためいて間違えて 自分の影を

踏んだのね

心があるから こんなにも苦しいのなら
私の胸を切り開き 愛も心も掴み出し 薔薇の根元に

埋めてちょうだい

百年経ったらまた会いましょう 君の口から咲き出る
百合

両脚を開かされる度 安易に撒き散らす黄色い花粉

僕には馨が強すぎて むせるばかりで涙がポロポロ
せつかくの思い出が色褪せて せつかくの憧れが台無

しだ

君がうっかり大人になって知らないうちに手に入れて
しまった自由は

理想通りの不自由で思いの外理不尽なものさ

やめた やめた やめた そんなの言外でもつてのほ
か

もういいから私の前から消えてちょうだい

私たち二人の肖像画もやがては蛆蟲が喰い破るの

あなたはいない わたしもいない そこにはただ顔の
無い だけか

血が震えるほどの寂しさを何度味わえば君と僕とは一
つになれるのだろう

ああ それまでは退屈な大観覧車 回転木馬の永久運
動

閉じたまま蔦の絡まる 唇は真紅に塗られた小さな枢
ギシギシ幽かに軋んだかと思うと すぐに言葉を飲み
込んで

ただただ沈黙を口ずさんでいる あのアンニュイな重
色

溺れる魚

胎児に還った僕の視力は極めて正確であり 感覚は極
めて純粹であり

認識は不器用なまでに完璧であり 表現は極めて精緻
にして明確であり

僕は自らを透過して世界の涯から僕の沈黙の聲にまで
至り人々の欲する

形ならざるものから立ち上がって既知（きち）の線と
整然と並べられた

諸中心に沿って進みながら 僕は自らを追い 自らに
答え 自らを反射し

自らを反響し 無限の鏡に戦慄する
僕は硝子でできているんだ

楕円形の鏡 瘤のある鏡 罅割れた鏡

壁から外して伏せられた鏡 布を掛けられ死んだ鏡
鏡は 肉体という牢獄の向う側 胎児の姿で震えてる

僕の魂を映し出す
鏡は 僕の内側に複雑に入り組んだ回廊を廻らせる

杳として底の知れない迷宮への入口

鏡は 僕の問いかけに予期せぬ波紋を広げる泉

何度尋ね返そうとも 銀のスプーンで心臓を抉り出す

ような残酷な答えに終始する

きつとナルキッソスが手酷くふったエコー達の度が過ぎた悪戯だろう

鏡は

実は驚くほどその表面が柔らかくて 頬ざりすると僕の後ろに直立している母の

式典の白い手袋をはめた 細い指先に触れるんだ

ほんの一瞬でも 他愛もない気まぐれでも 残酷な嘘

でもいいから

僕を愛してくれたなら

疼く頭を貴方の膝の上に置き 深い安堵に眼を閉じて

ひとおもいに舌を噛み切るだろう

ああ 仄かに薔薇が馨っている 貴方の膝は 貴方の

腕は なんて優しい断頭台

鏡は 焼き捨てたはずの古いアルバム

僕の面差しがダヴィンチの聖アンナに何処となく似ているとしたら

それは 僕の顔に母の顔が重なって見えているからに

他ならない

ああ 幼い頃の記憶は夏の暑さに死臭を放つ典雅で床

しい一輪の薔薇

引き攀ったような微笑（ほほえみ）でセルロイドの頬

を歪めて

静止したまま徐々に腐乱してゆく聖家族

式典の白い手袋をはめた 母の細い指先が 僕の口を

抉じ開けて喉元深く

受難の柘榴を押し込んでいる 口から溢れて滴る果肉

は黒一色

祝福に訪れた天使は悲鳴を飲み下し 静寂が空いつぱ

いに奔めきあつて

世界は巨大な柩のようだ

僕は胸一杯に罅えた薔薇の馨を吸い込み 匂いやかに

吐いてはカグロキ闇を呼吸する

寂しい頬を 寂しい鴉の羽根が打ち 僕は漆黒の眼を

睜る

またとなげめ

鍵のかかった少年は静かに眠る死者達と夜毎の夢で枕

を並べ

一瞬の回想の中 在りし日をひっそりと生き続ける彼

らと同じように

時間が経つにつれ少しずつ逆しまに歳をとっていく

時計の針があと数百回円を描けば 僕は
まだ生まれぬ先に腹の中から美しい母の乳房を見て
いた頃へと戻る

胎内回帰の夢に溺れ 命を懸けて迷宮の中心に閉じ
こもる その病弱な魂

夕べ エルグレコ of 地獄 これは胎児が見ている夢だ
生と死 愛と憎しみは 門外不出の四重奏団（カルテ
ット）

鋭いヴィオロン 激しい律動 独り泣き叫ぶ子供のよ
うだ

美しく冷たく灼熱する愛憎 思い出の中でさえ
僕を去勢する恐ろしい母の歯のあるヴァギナ

肉体の性別と心とが一向に一致せず
ヒエラルキアから外れた僕は生きていることすら罪で
あるように

父、母、教師、姉妹、
大勢の大人、それに追従する子供らに随分と長い間

執拗に責め苛まれ続けてきた
棘だらけの言葉の筈（しもと）で無抵抗な僕をしとど

打ちすえた後には
彼らは必ず誇らしげな顔をした

時代遅れの異端審問官を気取る彼らにとって

僕は忌むべき黒死病（ペスト）患者で 鈴を鳴らすレ
プラで 神の怒りをつけた結果の奇形で

狂人で怪物で天より墮ちし暁の子
そして何よりも自ら死を選ぶべきユダだった
みんなが僕を 死んだらいいなと思つてる

僕が生まれた聖八月

セピアに散らばる蟬の羽根からすぐさま想起されるの
は

愚かで勇敢なイカロスの墜落だ

十四回目の誕生日 祝福の言葉どころか母は口さえき
いてはくれず

飲み込む涙に息が詰まって苦しくてたまらなくて
喉が 胸が 体のあちこちが内側から爛れたように痛
かった

神様 無辜の罪で日々魂に刻みつけられてゆく癒えな
い傷を聖痕と呼び

僕は喜びをもって受け入れるべきなのでしょうか？
神様 いるなら今すぐ降臨（おり）てきて 僕のお母
さんになってよ

眩しいアポロンの季節の只中で

腐りゆく薔薇の糜爛も露わな花卉（はなびら）に埋

(うず) もれながら

墳墓の蝶が唇に留るのを待ちわびて 僕は ゆっくり
狂ってゆく
魂は鏡のように壊れるんだ

僕が内在する地獄 これは胎児が見ている夢だ

母性の裏切り 聖母(マリア)の嘘が

僕をこんなに寂しくしたの

僕をこんなにおかしくしたの

母が不在の母の部屋で密やかに母と密通する

僕は白いドレスを纏い

三面鏡を広げた大きな鏡台の抽斗から最も赤い口紅を

選び出し

覗いたら眼が潰れる神々の秘密の儀式のように厳かに

塗っていく

こみあげてくるのは象徴的で闇より暗い黒を彷彿とさ

せるラファエル前派の不吉な微笑

鏡に映る僕は

清く涼しくゾツとする 胸を搔き毟るような あの恍

惚となるような

懐かしく慕わしく恐ろしい母そっくりだ

式典の白い手袋をはめた僕の指先が 罪深く膨らんだ

百合の蕾を折檻する

鏡の国での絵空事 鎖を引きずり登る階段は十三段

その頂点で綾なす月光

真つ直ぐ捻じれて貴(あて)に咲く薔薇 罪と罰と苦悩

とは僕を絶頂(いか)せる神の鞭

愛の剥き出し 愛の残骸 偽物の安らぎが容赦なく魂

に齧りつく

またとなけめ

鏡よ鏡 魅(まど) わしの影投げる優しい悪魔 合わ

せ鏡の迷宮でこのまま僕を抱き殺してよ

包帯を剥ぎ取り そろそろ二人とも裂けた傷口を露わ

にしようか 僕が折檻する番だ

またとなけめ

鏡の国での絵空事 鎖を引きずり登る階段は十三段

僕の脳髓で綾なす月光

真つ直ぐ捻じれて自らの棘に傷つく薔薇

血を吐きつ媚態に擬した懊悩は神を絶頂(いか)せる

僕の鞭

愛の剥き出し 愛の残骸 偽物の安らぎが容赦なく魂

を齧り始める

またとなけめ

鏡の国での絵空事 鎖を引きずり登る階段は十三段

僕の眼の前で綾なす月光

ドレスを裂いて裸でのたうつシーツの海 高く高く羽ばたきながら沈んでく

生々しくも観念的なベッドシーン 痛みは肉の喜びへと淫りがましいメタモルフオーズ

愛の剥き出し 愛の残骸 偽物の安らぎが容赦なく魂を齧り尽くす

またとなげめ

足りない足りない まだまだ足りない全てが足りない

愛も接吻（くちづけ）も抱擁も言葉も仕草も全部足りない

僕には母というものが先天的に欠落してる

神様 いるなら今すぐ降臨（おり）てきて 僕のお母

さんになつてよ

ねえ神様 僕の生まれた聖八月 蝉がセピアに羽根を

揺らす夏の暑い日盛りに

僕の好きなポッティチエリのマニフィカトの聖母そつ

くりな顔をして

式典の白い手袋をはめた細い指先で 御願いだから生

まれたばかりの

僕を優しく絞め殺して

鏡の国での絵空事 鎖を引きずり登る階段は十三段

その頂点で綾なす月光

真つ直ぐ捻じれて貴（あて）に咲く薔薇 罪と罰と苦悩

とは僕を絶頂（いか）せる神の鞭

愛の剥き出し 愛の残骸

鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡

鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡

鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡

鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡 鏡よ鏡